

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.242

2023.11.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

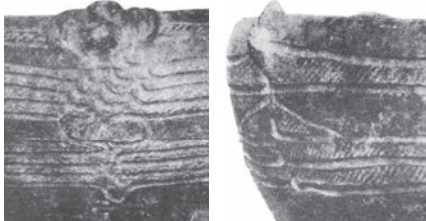
— 『日本先史土器図譜』と現在 —

鈴木 正博

● 第54回 ● 「加曾利B1式」文様帯の実際

『図譜』は「B1式」を「**体部には多く並行線化した磨消縄紋**を有して居る。口縁には**小突起、刻目**等加えられることがある。」(ゴチック体は引用者、以下同様)と概観する一方、図版解説では「**体部**」と「**口縁**」の文様に融合関係を指摘し、**文様帯の変化への新たな視点**とする。そこで概観を超えて「**I文様帯**」と「**II文様帯**」の実際から改めて『図譜』の「B1式」に接近する。因みに山内清男の部位表現は慣例と対照すると、「口縁」は「**口部裝飾帯**」の口唇部、「口頸部」は口縁部と略同じ部位を指すが判断が難しい場合も多く、「体部」は器種等により複雑であり、その都度触れる。

先ずは**変化への新たな視点**について確認する。第57図は図版26-1(福田貝塚)と26-2(取手市中妻貝塚)の部分写真である。「II文様帯」は共に「**並行線化した磨消縄紋**」(以下、「**横帯磨消縄紋**」)が展開するだけで無く、「**横帯磨消縄紋**」を上下に配置する横帯分離空間部には、突起下の要所に上下を接する円弧形



▲第57図:『日本先史土器図譜』第Ⅲ輯から図版26部分転載
図版26-1(左:福田貝塚)・図版26-2(右:中妻貝塚)



▲第58図:『日本先史土器図譜』第Ⅲ輯から図版25部分転載
図版25-1(左:椎塚貝塚)・図版25-2(右:中妻貝塚)

や三角形等の「**幾何学形磨消縄紋**」が配され、上下の「**横帯磨消縄紋**」と一体化した「**横帯間幾何学形磨消縄紋**」を形成する。「**横帯磨消縄紋**」の要所には「**横帯区切文**」として凹点と弧による「**お玉杓子文**」の如き独特の装飾を附し、「**II文様帯**」展開の構図属性とする。第57図の鉢2個体の解説では「**突起は(中略)体上部の文様と連続して居る。**」と**突起の位相変化**に注意を促しており、「口頸部」に於ける「**連続**」の実態を「**I文様帯**」として検証する。

図版26-1は口縁部下端に「**横帯斜行刻目文**」を巡らし、**扁平ボタン状突起**を口唇から「**横帯斜行刻目文**」まで覆う程の大きさで装飾する点、並びに「**横帯間幾何学形磨消縄紋**」が「**横帯斜行刻目文**」とは異なる文様帯を成す点から、**突起と「横帯斜行刻目文」の一体化**が「**I文様帯**」となる。

図版26-2は「**横帯間幾何学形磨消縄紋**」の上端を口縁部直下まで配し、口唇からは「**棒状刻目突起**」を縦長に附し、口縁部直下の「**横帯磨消縄紋**」には両者の「**連続**」を見るが、図版26-1の「**I文様帯**」とは様相が異なる。それは図版26-2の「**I文様帯**」認定に関わる問題であり、口縁部直下の「**横帯磨消縄紋**」は「**お玉杓子文**」の存在からも「**II文様帯**」とすべきであるが、となると「**I文様帯**」はどこを指すのであろうか。口縁部直下の「**横帯磨消縄紋**」上端を区画する横線文をみると、「**棒状刻目突起**」を目指すように被さる状況が認められることから、「**棒状刻目突起**」と一体化する横線文までが「**I文様帯**」と考える。ここに「**突起と体上部文様一体化現象**」が浮上する。

図版26-2の「**I文様帯**」は不明瞭な部分を有し、それを第58図の図版25-1(茨城県椎塚貝塚)と25-2(中妻貝塚)で検証する。共々3単位の小波状口縁の頂点に「**横帯菱形突起**」(本連載第21回参照)、そして頂点同士の間となる波底部には「**棒状刻目突起**」が附され、「**内傾口縁部**」(「口頸部僅に内傾する」)と「突

起と体上部文様一体化現象」が共通する深鉢2個体である。

図版26-2の「**横帯間幾何学形磨消縄紋**」は三角形状であるが、同じ中妻貝塚の図版25-2も「**横帯菱形突起**」下に「**三角形磨消縄紋**」が配される等、**深鉢一鉢等異器種間「II文様帯」共有関係**が顕著である。とは言え、瓜二つの「**II文様帯**」関係では無く、図版25-2では「**三角形磨消縄紋**」の上は「**横帯磨消縄紋**」が見られず、小波状口縁に沿った横線文のみで、縦長の「**棒状刻目突起**」を被せる関係からも「**突起と体上部文様一体化現象**」による「**I文様帯**」となる。「**棒状刻目突起**」に加え「**お玉杓子文**」までの共通性かつ限定性が加わるならば、両者は**一定の装飾を共有する型式学的同時性**の好例となる。

器種別文様帯の実際は図版25・26の「**I文様帯**」と「**II文様帯**」の在り方が代表的となる。続いて図版25と同一「**範型**」の**型式学的順序関係**(「**文様帯シーケンス**」)への接近が企図される。図版25-1は「**I文様帯**」である小波状口縁頂点の「**横帯菱形突起**」と波底部の「**棒状刻目突起**」、及び懸垂する「**横帯磨消縄紋**」の構図が、同一「**範型**」の図版25-2と密接な類似関係を示すものの、「**II文様帯**」が図版25-2とは似て非なる構成である。これまでの3例は「**横帯間幾何学形磨消縄紋**」か、もしくは準じるが、問題となる図版25-1の「**II文様帯**」にはそれが見られず、横帯間は「**区切り縦線文**」が「**幾何学形沈線文**」としてやや大きく誇張されて簡素に配置される。ここに同一「**範型**」の「**横帯磨消縄紋**」にも拘らず、「**横帯間主文様**」を始め「**横帯区切文**」の区切り文様に至るまでの顕著な違いも導出されており、次回ではその成因を順序付ける手続きへと論が展開される。

畢竟、『図譜』の「**B1式**」に見る**変化への新たな視点**は、**文様帯の変化を単なる違いとして思考停止せず型式学的に変化の順序を読み解く**、「**文様帯シーケンス**」への誘いに尽きる。

*巻頭連載は隔月です。今回は大村裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 「加曾利B1式」文様帯の実際(第54回) 鈴木正博 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイパレット・サイト(第235回) 岡島永昌 …3
■考古学の履歴書 私の考古遍歴(第6回) 工業善通 …2	■考古学者の書棚 『縄文土器大観 1~4』 堀田雄二 …4

考古学の履歴書

私の考古遍歴 (第6回)

工楽 善通

1970年には長野県更埴市(現千曲市)の森將軍塚古墳が地元業者による下方からの採石により、崩壊の危機に曝されているとの連絡が県教委から入った。当古墳は東京教育大学考古学研究室の岩崎卓也助教授らによって、'65~'68年に墳丘実測と発掘調査が実施されていて、'65年には長野県の史跡指定を受けており、古墳そのものは保護されてきていた。ところがその後の採石が急速に進み、事態が悪化した。その対策を協議するため、6月に入って私が現地を視察することになった。県教委で種々現状を聞いたのち、古墳へは当時担当技師であった神村透さんと桐原健さんが同行してくださり、恐縮千万であった。お2人の後について回りかねた山道を登って、この辺から墳丘が始まるはずだと説明をうけても、ひどい雑木林の中ではほとんど古墳の姿はつかめなかった。墳丘上からもその下の採石による危険が及んでいることも観察できなかった。下山して古墳のある丘陵の周囲を歩いてみると、古墳の北斜面と東斜面で2業者が採石を進めており、特に東側がひどく、古墳にほぼ垂直に迫っていることを実感して帰京した。

そして色々調べてみると、この更埴市での採石の許認可は、通産省(現経済産業省)鉱山局の中部地方担当部署がおこなっていることがわかった。早速、霞が関にある鉱山局へ行き県史跡である古墳保護のため、この採石を中止させられないかと持ちかけた。担当官は近くの住民に危害が及ばない限り無理だと言い、また、ここでの砕石は県道の整備にも使用しており、局としては業者の採石が円滑にいくように指導しているのだから、文化財の保存を優先させるわけにはいかないとの強い返答であった。そこで私は文化庁では国の史跡指定にする方向で進めると言う「もしそうなのであれば考える」という返答をもらって文化庁へ戻った。その旨を課内で相談した結果、早急に国の史跡とする方向で進めることになった。以後、審議会に提出する資料作りが忙しくなった。教育大の岩崎研究室へ行って、発掘調査の際の実測図や写真類を借用したり、県教委とは古墳の安全を考えて、指定範囲をどうとるかなど再三連絡をとり合った。最終的に史跡指定範囲が凡そ決った段階で、改めて現地踏査をするため森將軍塚古墳へ行った。この時は行程上更埴市訪問は日曜日となってしまう、朝9時過ぎに市の教育長さんに出迎えていただき、恐縮したことをよく覚えている。

指定関係の資料も整い'71年2月に文化財保護審議会にかけて無事パスし、3月に正式に25,300㎡余が国の史跡となった。市は直ちに古墳保存のため、墳丘下に及んでいた採石中止のための代替地を用意して業者を説得し、2ヶ所での採石は中止となった。市は斜面の崩落防止のための復旧工事にとりかかることになった。古墳そのものの整備事業は1981年に開始して、11年に及ぶ工事ののち、かつて先の見えない雑木林に覆われていた古墳は、見事に1400年前の姿に变身した。

初回に森將軍塚古墳を見学した際には、県教委のお2人から墳丘斜面の木立の間から、丘陵北方に広がる水田域が更埴条里跡だという説明をうけた。写真に撮ろうとよく見ると、稲田の広がりの中に現水路や畦道とは別に、直線状に色変わりしている所が見受けられた。私はこれはクロープマーク(作物の生育に土壌が影響を与えた痕跡)だと確信してシャッターをきった。東京で写真を焼き付けてよく観察すると、圃場整備後の畔を越えて変色帯が広域に延びていることから、圃場整備前の条里遺構が稲に影響して、地上に出てきたものと考えた。この段階で県教委のお2人にも、説明を

加えて写真を送った。'68年に刊行された『更埴市条里遺構の研究』に添付された図を見てみると、ここに記された埋没条里遺構と、今みえる稲の変色帯の位置がほぼ一致することがわかった。

埼玉県行田古墳群中の稲荷山古墳周囲の濠の土中の水分量の差が、地上の土色の差に表れること(ソイルマーク)を紹介した写真はよく紹介されて知られているが、稲によるクロープマークは私にとって新知見であった。以後列車などで移動する際、車窓から稲田を見ていると畔を越えて円であったり線状であったりする変色痕が目につくようになった。

私は、水田の水を落とし、稲を刈り取る直前であれば、その変色の識別が鮮明となり、効果的な写真が撮れると思った。そこで地元へ稲刈りの月日を確認したところ、10月10日過ぎということだった。私は、古墳とは関係なく私的な興味で'71年10月9日に、カメラにコダックのカラーフィルムを装着して將軍塚へ登り、見張りの良い所から条里跡の広がりを撮った。モノクロ写真と違いやはり一層識別し易いものとなった。今であればドローンによる高所からの撮影だと、どんなにか効果的な写真になっただろうと思う。地表に現れた土壌の色調差による遺跡探査の手法は、1930年に森本六爾氏が雑誌『考古学』で、英国のクロフォード氏らの成果を既に紹介している。後日奈文研で、写真測量を手がけていた牛川喜幸氏にこの写真のことを話すと、東京大学生産技術研究所の大島清先生が航空写真によるこの種の写真の判読に詳しいと教えてもらい訪ねた。特にドイツで盛んなようで、“Photogrametry”という雑誌に、アーヘン工科大学のA.マーチンという女性教授がレポートを書いているという話を伺い、何冊かお借りしてきた。それによるとライン川流域で航空機からの撮影により、ソイルマークやクロープマークから、ローマ時代の集落などの遺跡を見つけ出すことを継続しておこなっているようである。

日本では稲作田が多いことから、このクロープマークによる遺跡探査が進めば効果的だと思っているが、その後この研究はほとんど進展していない。

ほぼ2年間余に及ぶ森將軍塚通いは、私にとってもう一つプライベートな役割をもっていた。その頃、奈文研で同僚の横田義章氏が体調を崩して郷里の松本市の実家で療養中であった。寝込んでいたわけではないので、私は長野へ行くたびに彼と連絡をとり、時間の許す限り夜行列車を利用し、朝7時前後に松本駅や長野駅の食堂で面会し話し合うことを楽しみにしていた。その後県庁や市役所を訪ねて本務をこなすようにしていた。後日氏は回復して、'71年には福岡県教育委員会の技師となり、前年に奈文研から着任していた藤井功さん、西谷正さん、栗原和彦さんと合流して、大宰府跡の発掘調査に元氣であたることになった。

略歴

1939年	兵庫県高砂市に生まれる
1958年	兵庫県立高砂高等学校卒業
"	明治大学文学部史学地理学科入学
1964年	同 大学院修士課程修了
"	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ入所
1969年	文化庁記念物課へ出向
1973年	奈文研平城宮跡発掘調査部第2調査室へ配属
1992年	奈文研飛鳥資料館 学芸室長
1995年	埋蔵文化財センター長
1999年	奈良国立文化財研究所定年退職
"	(財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所勤務
2001年~2021年3月	大阪府立狭山池博物館館長

隔月連載です。次回は山本曜久先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 235

西安寺跡 ～奈良県北葛城郡王寺町

岡島 永昌

現在、舟戸神社の境内地になっている付近では、飛鳥時代以降の瓦が散布することで知られ、古くからそこが西安寺の中心伽藍があった遺跡であると考えられてきました。

西安寺跡研究の嚆矢となったのは、地元の王寺町で生まれ育った保井芳太郎氏で、保井は、昭和の初めに郷土史家として、同時に古瓦や古文書・古記録を大量に収集したコレクターとして活躍しました。東京帝室博物館の石田茂作氏も保井に導かれて西安寺跡を探究し、古老の聞き取りから舟戸神社拝殿の北東に塔跡があって、本殿の南側が金堂跡に当たること、神社西側に「門脇」「馬場脇」の俗称が残ることから、西向きの方隆寺式伽藍配置であったと推測しました。



▲西安寺跡とその周辺(写真の上が北)

このように、西安寺跡は昭和の初めから存在が知られていましたが、長らく発掘調査されることがなく、ようやく平成27年(2015)になって、神社境内地で西安寺跡の遺跡範囲確認調査を実施しました。このときにトレンチを入れたのは、保井・石田の両氏が塔跡と金堂跡があると推測した場所で、金堂跡は確認できなかったものの、塔跡では心礎・四天王柱礎石の抜取穴のほか、



▲初めて確認した塔跡側柱礎石

一辺が1.4mを超える側柱礎石2個と乱石積基壇の一部が確認できました。それまでは、本当に舟戸神社に寺院遺跡があるのかさえ明確でなかったのに、礎石などによって基壇・建物の規模が復元できるまで良好に保存されているとは想像もしていませんでした。

ここまでの遺構が残されていた背景には、やはり遺跡が神社の境内地にあったことが深く関係しています。王寺町は、大阪のベッドタウンとして発展した町であり、舟戸神社のすぐそばまで宅地化の波が押し寄せています。そこが神社でなかったならば、住宅地として開発され、遺跡は消滅していたでしょう。ただし、もちろん神社境内地の外にも遺跡が広がっているので、今後、宅地化される恐れは十分にあります。そこで、西安寺跡を開発から守るべく、国の史跡指定を目指して範囲確認調査を継続していくこととしました。

神社境内地での初めての発掘調査で塔跡が確定したことを契機に、それまで想像すら難しかった伽藍配置が現地地形から読み取れるようになり、継続調査によって金堂跡、回廊跡が順に判明し、西安寺は南向きを基本とする四天王寺式伽藍配置であることが明らかになりました。ここで「基本とする」とあえて付け加えているのは、塔の北側に東西方向に棟をもつ金堂があるので四天王寺式と評価できるものの、塔の南は丘陵が張り出して狭く、代わって北側に流れる大和川に向かっては、下っていく地山に盛土して整地し、広大な敷地が設けられていて、まだ確認できていない中門が北に存在する可能性があるからです。また、金堂跡の北側の伽藍中軸線上で、木製灯籠の竿ではないかと見られる柱根を検出しており、金堂の北側には基壇をともなう礎石建物(講堂)がありません。つまり、木製灯籠は、北から南を向いて金堂を拝するためのものであった可能性を否定できず、西安寺は重要な古代交通路であった大和川、つまり北に向かって伽藍を開いていた可能性が残されています。

常識的には、伽藍が北を向くとは考えられないので、史跡指定を目指すうえでは慎重に解決しなければならない課題ではありますが、7年に及ぶ舟戸神社境内地での範囲確認調査が終了したため、昨年度に『西安寺跡発掘調査報告書—舟戸神社境内編一』というタイトルの総合報告書をまとめました。ここでは、西安寺は7世紀前半に金堂が建立されたことで創建され、7世紀後半に塔や回廊が建立されて伽藍が整っていく様相を見通しました。7世紀前半の軒丸瓦には、法隆寺若草伽藍所用のものと同範の瓦がある一方、7世紀後半には斑鳩の諸寺院とは異なる単弁蓮華文が独自に用いられています。西安寺も他の7世紀前半段階の寺院と同じく交通の要所に位置しており、とくに大和川交通を通じた大和の出入口部分に立地することを考えると、7世紀後半にかけて飛鳥の政治空間が整えられる一方で、中国・朝鮮半島との緊張した国際関係のなかで与えられた役割も視野に入れて検討する必要がありそうです。

遺跡の保存を図るには、土地所有者はもちろん、西安寺跡の場合は舟戸神社や氏子の方々、それに付近の住宅地に住む人たちの理解や関心を得ないことには始まりません。そこで、『西安寺跡発掘調査報告書—舟戸神社境内編一』は、学術的な内容を担保しつつもオールカラー印刷にして、写真や図を目立たせて、それらと遺構・遺物の説明文を並置して、まるで博物館図録のようにレイアウトしました。ふだん考古学に親しんでいない人も読みやすく、とまではいえませんが、ページを繰るだけでも遺跡の雰囲気を感じられるものにはなっていると自負しています。今後、無事に国史跡に指定されたならば、より多くの人が興味を持てるように、飛鳥時代寺院としての本質的価値は当然ながら、神社であるからこそ保存されてきた歴史的経緯も理解できるかたちで整備していきたいと願っています。

参考文献:

- 保井芳太郎「大和上代寺院志」大和史学会、1932年
- 石田茂作「飛鳥時代寺院址の研究」聖徳太子奉賛会、1936年
- 王寺町編「西安寺跡発掘調査報告書—舟戸神社境内編一」2023年(全国遺跡報告総覧でPDFを公開中)

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは池田裕英さんです。

考古学者の書棚

「縄文土器大観 1～4」

小林達夫 編・著、撮影：小川忠博／小学館（1988）

堀田 雄二

はじめに

私が考古学に興味を持ったのは、小学生の頃に父の手伝いで建設現場へ行った際、地中から出てきた土器を父が「昔の人が使った土器のカケラだよ。」と言って土器片を投げたのがきっかけだったと思う。その多くは家に持ち帰り、使い古しの歯ブラシで丁寧に洗い、見つけた場所・日時を紙切れに書いて、菓子箱・段ボール箱に入れて今でも大切に保管している。2歳歳上の兄が学校で歴史の勉強を始めると、自宅近くで土器・石器がたくさん出土する遺跡に連れていかれ、一緒に遺物採集をするようになった。兄が「雨上がりがよく拾えるよ。」と教えてくれたので、土曜日の午後や日曜日には兄がいなくても一人で遺物採集に出かけるようになった。そんな折、自宅近くの遺跡で発掘調査があり、授業で遺跡見学に連れて行ってもらった。担任の先生は、以前勤務していた中学校で郷土史クラブの顧問をしており、裏山で須恵器の窯跡を発見し、発掘調査をしたことがあるとのことで、考古学に造詣が深かった。見学に行った遺跡は弥生時代後期の集落遺跡である杵木遺跡である。説明者は、上田市立博物館に勤務されていた川上元先生だったかと思われる。遺跡発掘現場を間近に見た私は、近所に住む友達と一緒に学校終わりに毎日のように発掘現場に通った。廃土に転がっていた土器を調査員に持っていくと、「大きなカケラはこちらでもらうけど、小さいのは持って行っていいよ。」と言われ、真っ赤な土器を宝物のように綿にくるんで保管した。考古学に目覚めた私は、様々な本を読み漁った。その一冊は藤森栄一著「かもしかみち」であり、市立図書館や市立公民館の図書室にある大人が読むような歴史本や資料集なども読んでいた。中学生になると、郷土史クラブに入り、3年生ではクラブ長になった。夏休みに行われた他田塚古墳の発掘調査の見学に数人のクラブ員と行くと、発掘調査のお手伝いをさせてもらった。そこに愛車ブルーバードで駆け付けたのは、塩入秀敏先生であった。上田染谷丘高校の歴史班のお姉さま方から、「考古学に興味があるなら、来年度から共学になるからおいで。」と言われ、真に受けた私だけ上田染谷丘高校に入学した。歴史班に入ろうとしたら、顧問の先生が異動したために発掘調査はできないといわれ、小学生のころからお世話になっていた故黒坂周平先生が発掘されていた塩田城跡の発掘調査に参加させてもらった。

この発掘調査で、近隣の考古学研究者や郷土史研究者と接し、大学に進学して考古学を学ぶことが決定的になった。この間、黒曜石を拾いにクラブ員3人で和田峠まで自転車で رفتり、男女倉遺跡群の発掘調査を精力的に取り組みれていた故森嶋稔先生のお宅に電撃訪問したり、県内各地の遺跡めぐりをし始めた。

本書の概要

本書は、日本各地の縄文土器を網羅的に集成し、小川忠博氏により開発された展開写真を多用した写真集とみることができ、小林達夫氏をはじめとする縄文土器の第一人者による論考が、その価値を高めている。当時の資料群の状況では、型式設定されていなかった土器群も、様式としてその傾向が示されたことは画期的であり、現在ではその多くが型式設定され、その変遷・動態が明らかになってきている。同社により刊行された「原色日本の美術 1～32」でも1巻のみが原始美術として考古資料が扱われているだけで、それまでの同種の本では考古資料を美術品としても扱われなかったことが多かった。これは、芸術家の岡本太郎氏が縄文土器・土偶に魅せられ、情報発信したことと縄文土器とも土偶ともみられる芸術作品をたくさん制作され、多くの著作を発表して来たことも大きいだろう。とはいえ、縄文土器だけの大判の本が4冊刊行され、その写真のすばらしさが世間を動かしたことの功績は大きい。縄文時代の何度目かのブームを生んだのは確かである。

今後の課題

当時珍しかった小川氏の展開写真もさることながら、プロカメラマンによるライティング・被写界深度の設定・カメラの選択・土器の選択等は、その類を見ることができない。刊行から25年が経過し、最近では山梨県立美術館をはじめ、静岡県・秋田県などで小川氏の写真展が大々的に開催されている。この間にも、小川氏が新出土器類の写真を多く撮影されており、それらを含めた増補版の発行を望むのは私だけではあるまい。

アルカ通信 No.242

発行日 2023年11月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp